スウェーデン便り（３）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝1999 年 10 月 5 日

［本文］

小さな湖が点在する森の中の、小高い丘の上にヘリデン城がある。百年ほど前に、ティダホルムに、世界一のマッチ工場があり、そのマッチ王が居住した館（やかた）である。

城の八角の塔の最上階に私の部屋がある。学校の寮というイメージではない。ゆったりとした広さの八角形の部屋の、三方の窓から森や湖、点在する学校の建物、少し遠くにティダホルムの街が見える。朝の五時には街が朝焼けに包まれる。夕焼けは胸焦がす美しさである。しかも、それが七時ごろから十時ごろまで、ゆっくりと変化してゆく。

どこを見ても、絵はがきの中に居るような美しさの中で、微熱が続いている。私の肉体の内部で、異化と同化が、激しく反転し続けている。一日が、まるで映画の画面の中に引き込まれるように始まる。次の展開が全く予測できない。一日が終わっても、その日にあったことが何だったのか、ほとんど未消化のままなので、眠りがこない。

入学式は一時間ほどで、あっけなく終わった。校長の一人（ヘッドマスターとプリンシパルの二人がいる）が新入生の名前を読み上げ、顔を見て、にっこりして、それで終わりだった。

アートスクールだけあって、さすがにファッショナブルである。私は、友人のジャマット・カーンに貰（もら）ったパキスタンの服を着たが、地味な方だったろう。

二日目、朝八時半集合。前夜、誘われて、二十人ほどで街のパブに出かけ、ちょっと飲みすぎて二日酔い気味だった。辛（つら）い始まりだった。その日は、一、二年生あわせて百人ほどの生徒が、十人ずつぐらいのグループに分かれて「動物」というテーマで、何か創（つく）り出すということだった。

とにかく、言葉が分からないので、自分のグループが何をしようとしているのか、さっぱりつかめない。十時のティータイムに、城のサロンに行くと、ちょっとしたカフェ並みの、食べ物や飲み物がそろっている。既に、校庭の芝生のあちこちに、なにやら作り始めているグループもいた。

審査は午後二時から始まった。実に楽しい企てだった。わずかな時間に、パフォーマンスや寸劇、オブジェなどが作りあげられていた。幸い、日本から送ったものの中に毛筆があり、それが役に立って、私もいくらか面目をほどこした。

来週は、金曜日の朝六時出発で、バルセロナへの修学旅行である。既にスペイン語も、ちらほら飛び交っている。

この週末、多くの生徒が帰省して、城は閑散としている。クラブフィッシュを食べようとか、パブへ行こうとか、いろんな誘いがあるが、とにかく、ゆっくり眠りたい。

日曜日の午後には、マドレデウスのテープと、街の市場でインディオの若者から買ったエクアドルのケーナを持って、森深く入って行こう。

《注》クラブフィッシュ＝ザリガニに似た、スウェーデンの夏に欠かせない食べ物▽マドレデウス＝ポルトガルの音楽グループ▽ケーナ＝アンデス地方の縦笛